

光客の興味は台湾のグルメやおしゃれスポーツに集中して、台湾の歴史や文学、ましてや児童文学にはない。台湾の児童文学はいまだ「中国児童文学」の中に埋没し、多くの日本人にはその違いも認識されないのである。

*「独立」にゆれる台湾

かく言う私自身にしても、「台湾」や「台湾児童文学」を意識するようになったのは、一九九九年に台北で開かれた第五回アジア児童文学大会の時からである。

私が中国語を学び始めた一九八〇年代において、台湾はまだ戒厳令下にあり、国民党一党支配下にある反共国家のイメージが強かった。おそらくは、一九七二年の日中国交正常化以来、メディアも日中友好優先で、台湾を積極的に取り上げないよう「忖度」していたのだろう。中国関連の本を読みまくっていた私であるが、台湾関連の本の記憶はあまり無い。あえて言えば、父の書棚にあった邱永漢の経済本くらいだろうか。あの頃の私にとって、台湾は「見えない」存在だった。

台湾が視野の内に入ってきたのは、一九八七年に戒厳令が解除されて、民主化運動が高まりをみせる一九九〇年代になってからである。その頃から、台湾は中国大陸とは違う、独自のアイデンティティを模索するようになり、それが映画や文学にも反映されるようになってきた。台湾ニユ

ーシネマが話題となったのはこの頃だ。侯孝賢監督の『悲情城市』（一九八九年）や『戲夢人生』（一九九三年）をミニシアターに見に行つて、歴史的な背景がよく分からなくて居眠りをし、けれどこれは分らないで済ましてはいけないのだろうと強く感じた。今から思えば、これが私と台湾文化との最初の接点である。

さて、私が台湾児童文学と出会うきっかけとなったアジア児童文学大会というのは、韓国の李在徹教授の発起により開かれるようになったもので、東アジアの児童文学関係者を中心に、研究発表と交流が行われるものである。一九九〇年に第一回大会がソウルで開かれて以来、韓国・日本・中国・台湾の順に隔年で大会を開いており、第五回大会は、一九九九年八月八日から十日にかけて台北市立図書館で行われた。

今から思い返してみても、あの時のアジア児童文学大会に対する台湾側の力の入れ方は大変なものだった。スポーツの国際大会のような華やかなオープニングセレモニーの後、びっくりしたのは、当時台湾の総統だった李登輝氏が、祝辞を述べるに登壇したことだった。

かつてIBBYのニューデリー大会（一九九八年）において、日本の美智子皇后が基調講演をしたということはあったが、国家元首クラスが児童文学の大会に参加して祝辞を述べるというのは、他にあまり聞いたことが無い。総